

調査報告

大分県におけるピーマン斑点病菌の薬剤感受性について

大分県農林水産研究指導センター 農業研究部 たまのい あきら やまさき しゅういち
玉野井 昭・山崎 修一

はじめに

大分県は夏秋ピーマンの産地で、臼杵市、豊後大野市および竹田市等を中心に雨よけハウスによる栽培が主に行われており、県全体で栽培面積 126 ha、産出額 29 億円 (2021 年度産) を計上し、西日本一 (全国第 3 位) の産地である。

ピーマン斑点病 (*Cercospora capsici*) は、主に葉に発生し、多発生時には葉柄、果柄および若い茎にも発生する。葉では初め白色の微小斑点を生じ、のちに周縁部が暗褐色または灰褐色の同心輪状に拡大して 10~20 mm の大きな病斑を形成する (図-1)。病状が進展すると下



図-1 ピーマン斑点病の葉における病斑

葉の葉柄のつけ根から順次落葉し、頂葉をわずかに残して枝梢のみとなる。発病適温は 20~25℃ で、多湿環境で発生が多い病害である (川越ら, 1989)。

本県における 2021 および 2022 年の 6 月は本病の発生が平年よりも多い傾向が認められた。同月は栽培期間の前半で着果負担がまだ大きくない時期での発病増加であり、九州北部の梅雨時期降水量の平年比をみても特に降水が多い年度ではなかったことから、薬剤感受性低下の可能性が疑われた (図-2, 表-1)。

Cercospora 属病害では、ダイズ紫斑病菌 (*C. kikuchii*) およびテンサイ褐斑病菌 (*C. beticola*) 等で耐性菌の発生が報告 (吉松ら, 2005; 高城・宮野, 2020; 宇山・長谷川, 2022; 宮野, 2022; 渡辺, 2022; KAYAMORI et al., 2020) されているが、本病菌に関する報告はない。

そこで、本病を対象に薬剤添加培地を用いた培地検定およびピーマン苗を用いた生物検定を実施し、薬剤感受性の実態を調査したので、報告する。

なお、本研究で供試した薬剤のうち、シフルフェナミド顆粒水和剤は日本曹達株式会社、ピラクロストロピン原体は BASF アグロ株式会社に御提供いただいた。ここに記して厚く御礼申し上げます。

I 培地検定

1 材料および方法

2022~23 年に県内 9 圃場から罹病葉を採取し、PDA

表-1 梅雨の期間と降水量 (九州北部)

年度	2018	2019	2020	2021	2022	2023	平年
梅雨入り	6/5	6/26	6/11	5/11	6/11	5/29	6/4
梅雨明け	7/9	7/25	7/30	7/13	7/22	7/25	7/19
梅雨時期降水量の平年比 (%)	108	96	192	43	68	105	100

出典元：気象庁 HP (https://www.data.jma.go.jp/cpd/baiu/kako_baiu04.html)

Fungicide Susceptibility of *Cercospora capsici* Causing Green Pepper Frogeye Leaf Spot Disease in Oita Prefecture. By Akira TAMANOI and Shuichi YAMASAKI

(キーワード：ピーマン, ピーマン斑点病, 薬剤感受性, 寒天平板希釈法, 生物検定)